

ISOM Japan NEWS Letter

17thICOM および台湾印象記

2014年11月1・2・3日の3日間、第17回国際東洋医学会学術大会（17thICOM）が台湾台北市の台大醫院国際會議センター（NTUH International Convention Center）にて開催されました。

この号では、学会に参加された先生方の、学会以外の風景をも交えての印象記を順次掲載していきます。

台湾印象記

東邦大学病院 松岡尚則

第17回国際東洋医学会学術大会については2014年第2号のISOM Japan NEWS Letterで紹介された。今回は、学術大会以外の合間の状況や学会出席者たちが観光した町や地域について紹介したい。

台湾入国

飛行機は九份上空から台湾に入る形で、台北松山空港へ到着した。2014年10月31日、東京での最高気温が20.8℃という気温であったのに、台北松山空港に降り立った時は、気温が30℃を越えており、日本から持ってきたセーターなど無用の長物であった。

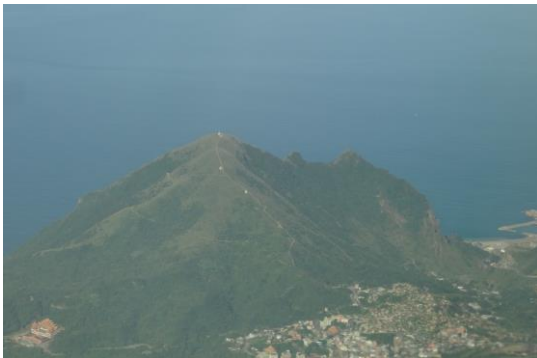


図1. 飛行機からみる九份と茶壺山。茶壺山の麓に九份の町並みがみえる。昭和八年(1933)に日本鉱業が黄金神社を建設したが、日本時代の後、蒋介石の命令でこの黄金神社も破壊された。今では旧黄金神社の柱だけが茶壺山の山頂近くにみられる。

饒河街夜市

台湾の庶民は信仰が厚い。そのため、昼間の仕事が終わった後、夕方ころから家族を連れて、寺廟へお参りすることが日常茶飯事である。寺廟に人が集まるため、商売を求める沢山の屋台が寺廟のまわりに集まってくる。すると食事だけでなく、衣料や日常生活用品などの商売もここで商うようになっていき、次第に夜市に発展していった。

饒河街夜市も夜市の東側の入口にある慈祐宮（ツォウヨウゴン）の門前町として発展して成立している。金魚すくい、かき氷屋、油揚げ（阿給）屋など日本にも見られるような夜店や、マスク（口罩）屋、刮砂屋など日本にあまりみられないようなお店もみられた。

国際東洋医学会が開かれたのは11月初めであるが、まだまだ気温が高く、かき氷屋も繁盛していた。



図2

「阿給」とは油揚げのことで、「阿布拉給（アブラゲイ）」と台湾語で呼ばれていたものが短く略されたものである。第二次大戦後、日本語が禁止され「アブラゲイ」という名前も使用できなかつたため、軍の取締りを



図3



図4



図5

恐れた台湾の人々が「阿給」という略語をつくったといわれる。

マスクというと日本では白一色であるが、台湾のマスク（口罩）屋では、オシャレマスクが売られていた。平面のマスクだけでなく、ピッタリと顔面にフィットする立体裁断のマスクもでていた。

図2. 饒河街夜市の孔雀魚・金魚屋。

図3. 饒河街夜市のマスク屋。日本にはないようなカラフルなマスクや動物のマスクなどもみられる。

図4. 刮砂屋。金属や水牛の角などさまざまな材料で作られた刮砂が販売されている。

図5. 刮砂屋にツボを刮砂で押しもらっている学会参加者。

迪化街

迪化街の町並みは、長屋式建物が続くのが特徴である。通りの左右にある建物がすべて軒をつなげて続いている。それでいながら、それぞれの建物はまったく違うデザインでできている。建物の種類としては、閩南形式、バロック建築、洋楼様式、現代主義様式などさまざまである。閩南形式とは煉瓦の建物に瓦葺きの屋根が付き、窓や入り口が木造りの建物で平屋が多かったが、現在ではその数を減らしている。バロック建築は17世紀にヨーロッパで流行した建築様式を台湾の豪商が取り入れた形式である。立体的な彫刻を外観に飾り、草花をモチーフにした装飾を組合せ、屋上に豪華な石の装飾を付ける。中央が山のように盛り上がっている山牆という装飾となっている。洋楼様式は二階建ての建物で屋上部に石造りの額を数点並べて飾りにしており、女兒牆と呼ばれている。現代主義様式は直線をうまく使いシンプルで現代的なデザインである。丸窓周辺に彫刻をするのが特徴の一つでこの丸窓を「牛眼窗」と呼ばれている。

迪化街の店で扱うものもさまざまに生菓のみならず、乾物、乾麺や米粉、佃煮、カラスミ、スパイス、布なども扱っていた。



図6



図7



図8



図9



図 10



図 11

図 6. 霞海城隍廟。霞海城隍廟は、恋愛の神である「月下老人」を祀っており、縁結びの神としてご利益があるとされる。独身の医師・薬剤師・鍼灸師たちは、お参りしていたようであった。

図 7. 迪化街の町並み。

図 8. 生薬屋では、十全大補湯の加減に枸杞・菊花を加えたものがハンドメイドで詰められていた。

図 9. 生薬屋の前におかれる鮫肌(魚皮)と学会参加者。

図 10. 紫河車も迪化街ではごく普通に生薬として販売されている。

図 11. 迪化街で飲茶をし、タブレットで写真を撮る学会参加者。

創見資訊信義門市

台北市信義区にある台北 101 の周辺は、近年、再開発事業が盛んである。学会終了後、この台北 101 の周辺地域である「創見資訊信義門市」のフードコーナーへ移動し、学会参加者たちと食事やスイーツを頂いた。

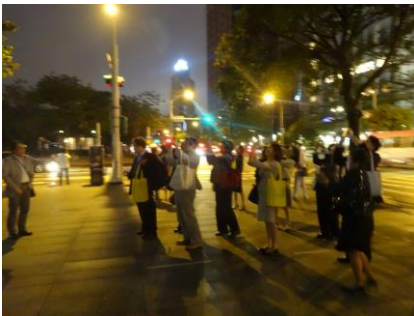


図 12



図 13



図 14

図 12. 台北 101 を一斉に撮影する学会参加者。

図 14. 「創見資訊信義門市」のフードコーナーでつろぐ学会参加者。

図 13. 霧の中の台北 101 の夜景。

九份

台湾北東にある九份。学会会場から距離はあるが、この九份まで足を伸ばす学会参加者も多かったようである。九份の町は急斜面に貼り付くように形成されている。1989年に『非情城市』という映画がヴェネチア映画祭でグランプリを獲得した。この映画のロケ地が九份と金瓜石であった。2つ



図 15



図 16

の村は日本時代に大きく形成されていった村で、鉱山が閉鎖されたあと、住民が村を去ってしまい、昔の家や施設だけがそのまま残っていた。

九份は清代にはわずかに九軒の家しかなく、買い物のときに「九つ分をください」といっていたことから、九份という名がついたとされる。それほど小さな集落であった。

19世紀末に金鉱山が発見され、多くの人々が金目当てに村にあつまった。初めに金鉱を管理していたのは藤田組であった。その後、顔雲年という人物と共同経営となる。「基隆顔家」として知られる台湾五大財閥として顔雲年は知られる。1920年（大正9年）には藤田組から全権を委譲され、九份鉱山の所有者となった。台陽鉱業を設立した。この顔一族の一人が一青窈の父である。日本統治時代が終了すると国民党管理下になったが、三年後、再び台陽公司の下での管理となる。1971年鉱脈が枯渇し、閉山。

九份の町は『千と千尋の神隠し』で出てくる町並みと似ているとも云われる。その中でも台湾の九份にある老舗の茶芸館として知られるのが阿妹茶酒館である。阿妹茶酒館はもともと鍛冶屋の店であった。斜面に建てられた家なので、奥行きがなくすぐ二階・三階へ上がるように作られている。

赤い提灯が照らしだす通りは、多くの人で、いっぱいであった。

図 15. 九份の阿妹茶酒館周囲の風景。豎崎路。

図 16. 九份の阿柑姨芋圓店で九份の海を望みながら飲茶を楽しむ学会参加者。

故宮博物院

故宮博物院では「鄰蘇觀海」と題して楊守敬が蒐集した図書の特別展（2014/06/07～2014/12/14）が行われた。

楊守敬は光緒6年（1880）に駐日公使である何如璋（1838-1891）の随員として招聘され、光緒10年（1884）に帰国するまで、多くの善本を入手した。彼は光緒14年（1888）にそれらを湖北黄州の「鄰蘇園」に収蔵し、更に光緒29年（1903）に武昌菊湾の「觀海堂書樓」に移して保存した。民国4年（1915）の楊守敬の歿後、政府は7万余円でその蔵書を買上げ、一部分を松坡図書館に手渡され、後に国立北平図書館に併合された。又、残りの部分は集靈園に保存され、後に故宮博物院の収蔵品となった。

日本影宋鈔本の『巢氏諸病源候論』、日本天文五年翻刊明成化間熊氏中和堂本の『新刊勿聽子俗解八十一難經』、森立之旧蔵の元刊本『太平惠民和劑局方』、小島尚質旧蔵の明刊本『蘭室秘蔵』、深江輔仁撰 森立之手書題記 日本萬延元年今尾道醇影写古鈔本『本草和名』など貴重な書を見ることが可能であった。宋版の『外台祕要方』も和刻との比較のため、和刻本と並べて展示されていた。

これだけの書を一堂に並べて、見る機会はそう多くはないであろう。国際東洋医学会学会開催と重なるように東洋医学と関連のあるこの特別展が行われたことは幸いであった。



図 17 故宮博物院の「光緒統 蔣公造像」（蒋介石の像）の写真を撮る学会参加者

ISOM Japan ニューズレター 2014 No. 2
発行日 2014年11月28日
編集者 ニューズレター編集委員会
発行者 安井廣迪
発行所 株式会社ジーエー企画
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-7
巖松堂ビル10F
Email ga-takahashi@lake.ocn.ne.jp
ウェブサイト <http://isomjpn.umin.jp/>

国際東洋医学会日本支部 ISOM Japan

東京都千代田区神田神保町1-7 巖松堂ビル10F
株式会社ジーエー企画内
TEL. 03-5283-5006
FAX. 03-5283-5416